

## 松本清張記念館

特集号 2023.3

令和4年度 中高生読書感想文コンクール

## 感想文紹介

## 特別賞

題

交錯

課題作品

「西郷札」

ひろ せ あや  
広瀬 綾筑波大学附属中学校  
3年

た「ため視線も合わず、季乃は気が付かない。再び会うのは、季乃が客として雄吾の俚に乗った時である。その降車時に「思わず上げたこちらの視線と合った」ことで、二人は本当の再会となる。

二頭立馬車で象徴される国の高官と、人力車の車夫となった落ちぶれた元士族。そして視線の交錯の程度による人間関係の度合い。この対比はその後の物語の地下になっっているように思う。その印象的な場面に新富座での顔合わせがある。西郷札を政府が買上げ

私が学校の中で一番好きな場所は、階段の「踊り場」である。上の段から声をかけられて振り返りながら見上げる時、下の段から友人に追いついて踊り場の鏡の中で視線が合う時。そんな交錯する場が好きだ。

この「西郷札」は交錯の物語である。西南戦争時に薩軍により発行された紙幣である西郷札。その造幣に関わった樋村雄吾が、人と交錯する度に人生の歯車が大きく回っていく。

作中では二度「運命」という言葉が使われている。一度目は、伊藤博文を襲撃しよう待ち伏せている男と居合わせた時である。その男は茶店から往來を見ている。そして二頭立馬車の中を「覗くように注視」して、狙うべき高官を確かめていた。二度目は、人力車の車夫となった雄吾が義妹の季乃と再会した時である。その初回は、「提灯の灯影で相手にはこちらの顔は見えなかつ

「覚書」が作中作となり入れ子構造になっているからだ。新聞社の「私」は、その覚書の長い文章を縮めて読みやすい文体にしたが、「ただ『覚書』どおりに書いていったにすぎない」とある。そうであるならば、基本の構成は覚書そのままということになる。すると、さらにもう一つの入れ子構造を覚書の中に見出せるのだ。

ちょうど物語の中盤で「さて『覚書』の記述はここで一転している」とある。ここから西郷札の買占めにまつわる話が始まるので確かに一転するのだが、それだけではない。覚書の書き手である雄吾が知り得ない事柄が多く語られ出すのだ。塚村が妻の季乃と義兄の雄吾の仲を疑い内密に調べさせる行動。さらには、季乃が雄吾に打ち明けていない内心の「不安な迷い」の様子が描かれている。その時の雄吾は季乃から見て「のんきに俚を曳いて出てくる」上に「何も知らないでいる」様子なのだ。覚書を記すにあたり、後日季乃から聞いたとも考えられなくはないが、東京に戻ってきた指名手配のような状態にある雄吾がここまで詳しく聞く余裕はないと思う。塚村の行動については季乃も細かく知りえないはずでもある。これらの描写から、作中作である覚書の中にもう一つの創作が入れ子構造になっていると考える。そして覚書全体が創作だとも思えるのだ。

そのように読むと、覚書の最後が「あきらかにその後が破りとられている痕跡がある」とは、他人に読ませないためだけではないと思う。「最後の策」で、雄吾が塚村を殺害し、彼の名が世に残らなかったと読者に推察させている。し

かし、私は疑問に思う。第一の選択肢である逃げることは、自分の保身だけになる上に塚村の術中に陥ると考え、やめている雄吾である。塚村を殺し自殺したとしても、季乃が夫を失い義兄は殺人者という立場になっってしまう。情愛を感じている季乃がそのような境遇になる行為を雄吾が実行するだろうか。塚村の存在が架空のものだったから、彼の存在を示す新聞記事も見当たらなかったのではないと思う。

創作だと考える理由はもう一点ある。本文の最後に、「買占めに狂奔している二人の人間が眼に浮かぶのであった」と「狂奔」で締めくくっている。「狂奔」という表現は、西郷札旋風で「あわてふためき」「目の色変へて」いる者たちを記述している箇所でも使われている。また、塚村の策略で政府による買占が上手いくと思ひ込んだ紙問屋二人の「うれしがりようは関係ない者から見ておかしいほど」とある。この「狂奔」と「おかしさ」を当時実際に感じていた人物が創作したのではないか。雄吾から覚書を受けとったとされる田中惣兵衛。彼がこの手記風の覚書の執筆者だと考えた。最後の部分が破られているのも、故意の演出か、または真の作者が種明かしをしている部分だったからではと考える。あえて悲哀な物語なのは、田中惣兵衛が西郷札旋風を滑稽なものとして直に見ていたからではないかと思う。

清張はあえて結末を明示していない。読書空間の踊り場で作者と交錯することができたら、視線を合わせて問いかけてみたい。私の読み筋はいかがでしょうかと。

## 最優秀賞

題  
短編小説の楽しさ

課題作品  
「西郷札」

ふくやま はるか  
福山 遥

筑波大学附属中学校  
2年



るには、もちろんあまり文章が古風であり「や」その前文は前にも言うとおろ浩瀚だから思い切って縮める必要がある。」という文章があるだけで読者には「覚書」が存在することが周知の事実で当たり前の事のように思えてきます。また語り手から物語への移行も自然でよみなく読み進められると思います。

さらに、雄吾の物語の中に「この間『覚書』の原文にはたいした記載はなく」や「原文には何とも説明がないが」とありますがこれは読者によみなく読み進めてもらうために、不要な情報を与えないようにしているのだと思います。雄吾の物語に集中させるためだとも思います。同じく「これから先のことは普通の歴史にあるとおりで詳しく書くことはない。」という表現が象徴的です。なぜかと言うとおそらく西郷隆盛の事は読者全員が知っていて西南戦争の物語や歴史背景に興味があることが想定されます。だからそれを詳しく書いてしまうと雄吾の物語のインパクトが薄くなりただの歴史小説になってしまうからです。

作者が描こうとしている雄吾は純粋なこの時代にいる青年です。地味な存在なので、作者はこの人物を際立たせるのに苦心したと思います。この時代の有名人の名前が出るだけで、読者の興味がそちらに向いてしまうからです。そして、物語の締め括り方も絶妙だと思っています。「最後の策」とは「雄吾は

家重代の銘刀をかいこみ鹿児島に駆けつけたが、」が伏線となり、塚村圭太郎を刺しに行つたと私は思っています。でも読み方によっては色々なパターンが考えられます。そもそも「あれほど俊英をうたわれていた塚村圭太郎の名がいつに世に残らなかつたのは何ゆえであろうか」という部分から、雄吾が自首して塚村の罪を訴え、実際に罪が認められ、明治政府から名前を抹殺されたかもしれない、という想像もふくらんできます。あつさり終わるのでなく物語の内容以上の想像がふくらんできます。

このようなことから短編小説ですが、読んだ私はまるで長編小説を読んだ気分になりました。これがこの小説の技法だと思いました。

長編小説は読みごたえがあるのでとても好きですけれど、何から何まで一から十まで手とり足とり解説や背景が記載されている長編は読んだという充実感がありますがあまり頭を使つて考えたな、という思いは残りません。その点、「西郷札」のような短編小説は想像を膨らませる要素がふんだんにちりばめられており頭を使つたな、という充実感があります。想像にたよる部分が多いので、「西郷札」に対する私の見解」というも

のをもつことができてそれについて他の読者と意見を述べ合いたいとも思います。そのような短編小説の楽しさを気づかせてくれた「西郷札」は私にとっても印象深い小説でした。他の短編も楽しみです。





# 最優秀賞

題 SNS流行時代における顔の意義

課題作品

「顔」

澤田 裕翔

埼玉県立川口北高等学校  
2年



これは、作者が読者向けに、この小説の外縁に仕掛けたトリックだ。ピカレスクロマンというと、自分の中の悪の部分、悪漢を応援したくなるものだろうが、そんなすつきりしたものではない。主人公に悪の美学のようなものはない。どちらかというと、私たち一人ひとりの中にいそうな、庶民的悪というべきものだ。

だが、その庶民的悪は、殺人まで犯しているのだ。私たちがなるべく見たくない人間の暗黒面を作者は炙り出している。だから読者は、正義の側に完全に立つて、主人公を糾弾することは、自分を糾弾することに等しいので気が引ける。かと言って、主人公を全面的に応援したくなる程、主人公を肯定したり許容したりしたい訳でもない。気持ちの悪い歯痒さが襲うが、言い換えれば、それは小説の醍醐味とも言える。読者をどっちつかずにさせる主人公の描き方のバランスは絶妙だ。主人公が逃げおこせるかのような場面、で、「ほつ」とした者も多かったのではない。一方で、主人公が犯人だとわかってしまい、逮捕も間近に迫る場面では、「やはりそうだな」と思ったのではない。

これは単純な勧善懲悪ものとは違う。人間には、善と悪の両面がある。身体に潜むエネルギーがどのように外化されるかは、その時の社会的コンテクストにもよる。主人公として、例えば恋人から愛想をつかされれば、殺人を犯さなかつた。善人が悪人を追い詰めるという単純な図式が成立する程、人間や社会は単純ではない。だから本作は、一見

「勧善懲悪もの」に見えて、世の中が実は勧善懲悪ではないことを逆手にとった作品なのだ。これが作者の仕掛けたトリックだ。

犯人の目撃者が、特徴的と言われる犯人の顔をよく憶えていなかったというのも、私にとっては、リアリティがある。私の父も、人の顔がなかなか憶えられない。脳の機能障害とまではいかなくても、認知の仕方に癖があるようだ。心理学の分野では、顔が憶えられない症状のことを相貌失認というのだそうだ。国木田独歩の短編「忘れえぬ人々」でも、身近な人より、風景に溶け込んだ人々の方を記憶しているエピソードが描かれている。

福祉部に異動し大勢の人と接するようになった父は苦労したらしい。ただ、そんな父でも顔を全く憶えられない訳ではない。「この人はAさんだ」と断定するのは苦手でも、「この人はAさんっぽい」とまでは分かる。Aさんっぽい人がAさんの席に座ること、やつとAさんだとわかる。職員としてはそんな感じで何とかそれで対応できる。だが、街中で同僚に会っても本当にその人か確信が持てない。

顔がなかなか憶えられない目撃者が、目撃時と同じような角度で主人公の顔がスクリーンに映り、思い出したのも「Aさんっぽい人がAさんの席に座る」と似たものがあつたのだろう。これは「分かる人には分かる」という感覚的な問題で、なかなか共感が得られないかもしれないが父から聞いていた話とそっくりだと思った私はリアリティを

感じた。

本作は、顔によって出世し顔によって破滅した男の話と要約することができ。それでは、顔とは何か。顔とは交換不能なものだ。整形手術をしようとしてないのだから。あたかも、一人は一つの人生しか持てないように。だとすれば、顔とは人生だ。善も悪も含み込んだものだ。交換不能なその存在そのものだ。だから、顔を持った存在を殺めることは、いかなる理由があつても、許されない。この顔の本質性は、時代が変わつても、変わらない。それ故、流行のSNSに「face book」があるのだろう。自分の人生から逃れられないことは自分の顔から逃れられないことと同義なのだ。この顔の本質性は揺らがないばかりか、個人が顔写真を情報発信する今、ますます現代的意義を帯びている。



## 優秀賞

題  
プライド  
課題作品  
「顔」

寺本 拓未

初芝富田林中学校  
2年



時として、人間は悪事を隠そうとして、更にまた罪を犯し、身の破壊を招くものである。

劇団俳優の井野良吉には夢があった。映画に出て、有名になって、沢山お金を稼いで、成功したかった。しかし、彼の成功は破壊と隣り合わせであった。

独特な風貌が印象的でチャンス掴み、幸運が訪れたと思っていた。と同時に井野良吉は自分の顔が売れるのを不安に思っていた。なぜなら井野良吉は昔付き合っていたミヤ子を殺害し、当時ある青年に自分の顔を見られていたからである。映画に出て有名になりた。でも顔が売れば売れる程、その青年が自分の顔を見て思出し、ミヤ子を殺したことがばれるかもしれない。幸運が近づけば近づく程、不安も大きくなってくる。せつかく訪れた幸運

は掴みたいが、殺人がばれる訳にはいかない。そこで、自分の顔を見た石岡貞三郎を殺害しようと企てる。結局殺害計画は未遂に終わるが、石岡貞三郎は自分の顔をはつきりと覚えていないことが分かり、安心した。石岡貞三郎は自分の出演した映画を観ないかもしれない。もし映画を観たとしても、自分の顔をはつきりとは覚えていないのだから、大丈夫だろう。きつとそう思っていたに違いない。しかし、残念なことに石岡貞三郎と出会ってしまったあの日と同じような場面があったことで、井野良吉の顔を思い出してしまった。

井野良吉が石岡貞三郎を殺害しようと試みなければ、ミヤ子の事件を思い出すことはなかったかもしれない。井野良吉の顔を思い出すこともなかったかもしれない。井野良吉は自分の顔を石岡貞三郎に思い出されてしまうかもしれないという不安から、その不安を解消しようと思事をしたので、不安が現実となったのであろう。

この作品の面白いところは成功と破壊が紙一重に描かれているところである。俳優として成功すれば、顔を知られ有名になる。そうすると、過去の殺人事件が明るみに出る。つまり、成功に近づく一歩が破壊への一歩になる。過去の自分の行いが自分の成功を阻もうとしている。悪いことをすれば、幸運に手が届きそうな一番良いところで、足をすくわれる。

清張は、悪事はいつかばれて、全て自

分に返ってくるものである。他人の不幸の上に自分の幸福はないと語りかけているのではないだろうか。世の中には裏が沢山あるが、正しく、真つすぐに生きなさいと導いているように感じる。

僕は小学四年生の時から六年生まで、不登校になった。四年生の時の担任、クラブと委員会の先生、そして校長先生の不適切な指導と言動が原因で、ずっと腹痛が続き、苦しんだ。苦しんでいる僕に、三人の先生は嘘をついて、更に僕を苦しめた。「顔」を読みながら、井野良吉の行いに、僕は三人の先生を重ねた。自分の行いを正当化しようとう嘘をついたのだろう。僕はひどく傷つき、大人が信じられなくなった。

今、僕は中学校で充実した日々を過ごしている。不登校だった僕がなぜ中学校に通えているかというと、小学校の時に僕を救おうと、手を差し伸べてくれた大人が沢山いたからである。担任の先生や心ある先生方、見守り隊の方や議員さん、保護者などの地域の人々、大勢の大人が僕を支えてくれた。悪いことをする大人もいるけれど、立派な大人も沢山いることを誠実な行動で示してくれた。だから、僕は大人を信じることができ、中学校にも通うことができている。

僕は小学校で各教科の授業は、あまり受けられなかったけれど、もつと大切なことを僕に寄添ってくれた大人から学んだ。不安で苦しんでいる僕に優しく声をかけ、僕が少しでも学校に行

けるように何かできることはないかと考えてくれた気持ちに救われた。だから、僕は今度は自分が支えてくれた先生方のように、苦しんでいる人に寄り添える大人になりたいと思っている。僕が先生方や地域の人々から受けた恩を困っている人に返していきたいと思っている。

僕には清張が「君を助けてくれた大人のように、正しく、誠実に生きなさい」とメッセージを送ってくれているように思える。

君はどちらの「顔」で生きたいのか？  
不誠実で身勝手な井野良吉の「顔」なのか？  
それとも信頼できる大人の「顔」なのか？

僕は尊敬し、信頼できる大人の「顔」になりたい。決して井野良吉や三人の先生の「顔」にはならない。それが僕のプライドだ。





高校生の部

## 優秀賞

題

私の器

課題作品

「砂の器」



石川 愛実

慶應義塾湘南藤沢高等部  
6(3)年

私が松本清張に出会ったのは、一昨年だった。推理小説でありながら、社会の問題に切り込む鋭い刃に私は絶句した。その時から清張作品を少しずつ読み進めている。少しずつというのも、清張作品を読むのには、相当の覚悟がいるからだ。この本は既に、愛読家の母の本棚にあった。中身は茶色に変色し、題名が示す不穏さのようなものが既に読む前の私を緊張させた。

蒲田駅近くのトリスバーから物語は始まる。翌早朝、国鉄の停車場で、男の遺体が発見される。身元不明のこの男は、前日の深夜、近くのトリスバーで連れの男と話し込んでいたということが判明。捜査を続けていくなかで浮上してきたのは、ヌーボーグループの新鋭の音楽家だった。彼の過去が明らかになっていくとともに、物語は第二、第三

の殺人事件を経て、犯人へ迫りつく。

私は中盤まで犯人は関川だとふんでいた。己の権力を誇示する者が持つ、権力のためなら簡単に道徳を飛び越えてしまう愚かさを見たからだ。いかにも権力者が起こす過ちだ。しかし、犯人は同じヌーボーグループの音楽家と賀だった。彼は音楽の実力もあり、権力者との密接なつながりも持ち合わせていた。絵に描いたような幸せを手にしていた和賀が、なぜ殺人を犯さなければならなかったのか。そこには、彼の出自が恵まれなかった事に端を発していた。

和賀は、父親がらい病だったために差別にさらされ、幼少期に悲惨な生活を送らなければならなかった。そんな彼を助けたのは、殺害された巡査だった。恩人である巡査との再会は、彼にとって決別した過去との再会であった。なんとしても、今の華麗なる地位を捨てるわけにはいかない。そして、彼は過去の恩人を殺害する。単に懐かしさで会いに来た巡査の思いに胸が痛くなる。と同時に、和賀の気持ちにも同情する自分がある。再会さえしなければ。しかし、そんな偶然の積み重なりが人生なのかもしれない、とふと思った。和賀が過去を封じ込めたのは、出自を知られると、築き上げた地位が崩れ落ちてしまうからだ。父がらい病だったために差別を受け、苦しい生活を強いられた。その境遇を抜け出すために、戦後の混乱に紛れ別人となった。当時のらい病へ

の差別は、本人や身内にも及び、結婚や就職にも差し障りがあった。差別や偏見によつて閉ざされた未来を、別人になることで決別し、才能を開花することができた。本来、彼の努力は讃えられるはずなのだ。差別により、人生が閉ざされた者がいることは、歴史が物語っている。

近年、「親ガチャ」という言葉が生まれた。子は親を選べず、生まれた親元次第で人生は決定するという意味で使われている。この言葉に私はショックを受けた。生得的条件で人生が決定づけられるとしたら、私たちは未来への希望を放棄することになる。生得的条件が支配する人生観の登場というのは、現代社会の闇を表しているのかもしれない。今日の格差社会が表すのも似たようなものである。生得的条件が人生に影響があるのは事実だが、人生の大半は、「これから」に舵があると私は思いたい。

和賀は、生得的悪条件を隠すことで、未来を手に入れたはずだった。音楽の才能でもって、その未来は輝かしいものになった。その音楽を殺人の凶器とした。先端をゆく音楽とその脆弱性がかえって哀れさを増長させる。時代の先端をいく文化は、革新的でありながら、本物になるか否かわからない危うさがある。本人であって本人ではなかった彼の道程を表しているかのようである。彼は、本物になれなかった。それは、和賀が権力を愛すようになった時

点で、再び別の虚像を作り始めたのかもしれない。

社会の差別や偏見により、過酷な状況におかれ、過去さえ隠へいしなければならなかった環境には同情できる。しかし、人はたとえ厳しい生得的条件が課せられたとしても、それを受け入れ、自分の人生の「これから」を切り開く余地があると、私は信じている。道徳から逸脱した行為は、結局自分を苦しめることになる。私達の生きる足跡は、消すことはできない。正々堂々と生きなければならぬ。厳しい時代を生きる私へのメッセージを受け取った。清張作品の醍醐味は、トリックを推察すること以上に、社会や人間の本质を考えさせることにある。作品の中の登場人物を通して、人間の愚かさを見、人間の性を知る。それを考える時、私の心の器は少しずつ強固なものになる。ひと波くれば、容易に崩れてしまう砂の像のような人間ではなく、本物を目指さなければならぬと思った。清張作品を読む時、社会や権力に常に疑問の目を向ける清張の姿が浮かぶ。世にはびこる通念が本当に正しいのか、私に問いかける。





## 佳作

### 中学の部

増尾 千慧  
筑波大学附属中学校 3年

題 虚像と実像  
(砂の器)

寺内 理央  
筑波大学附属中学校 2年

題 砂の器を読んで  
(砂の器)

藤田 智紀  
筑波大学附属中学校 3年

題 推理小説「的な小説」顔  
(顔)

右近 智弥  
春日市立春日野中学校 3年

題 顔  
(顔)

### 高校の部

鈴木 望由  
福岡県立小倉西高等学校 2年

題 顔に宿る闇  
(顔)

隼住 志帆  
熊本学園大学付属高等学校 2年

題 「顔」を読んで  
(顔)

田中 凜  
福岡県立小倉西高等学校 2年

題 松本清張に嘲笑された  
(砂の器)



## 選考委員紹介

株式会社文藝春秋  
文藝出版局第一文芸部長  
早稲田大学文学部教授  
早稲田大学国際文学館長  
松本清張記念館名誉館長

田中 光子  
十重田 裕一  
藤井 康栄

(以上五十篇順 敬称略)

第21回目となる令和4年度の読書感想文コンクールには、全国から204点の応募がありました。令和4年11月9日の最終選考で受賞者が決定し、特別賞、最優秀賞、優秀賞については令和5年2月11日に松本清張記念館で表彰式を行いました。

## 審査講評

選考委員 田中 光子

今年も多くの感想文が寄せられたが、とりわけ継続して応募される方の存在感が際立つ結果となった。

としての魅力を引き出し、SNSとの関連から現代性に照明を当てる。リズム感のある文章も魅力的だった。

昨年、最優秀賞を受賞した広瀬綾さん(筑波大学附属中学校三年)は、「西郷札」を登場人物の視線の交錯という観点から捉えた点が卓抜だった。小説の入れ子構造の分析や覚書の作者の予想も読みごたえがあった。二度目の最優秀賞ということで、「特別賞」となった。おめでとうございます。

優秀賞の寺本拓未さん(初芝富田林中学校二年)は「顔」から成功と破壊が紙重である点を読み取る。不登校だった筆者が信じられる大人との出会いを通じて回復していく過程が強いメッセージとなっていた。「砂の器」を選んだ石川愛実さん(慶應義塾湘南藤沢高等学校三年)は、論理的な文章で書かれていて、書き手の技量がうかがえる。「格差社会」「親ガチャ」という現代的なキーワードを用いながら自身の決意を述べて好感を抱いた。

同じ「西郷札」を福山遥さん(筑波大学附属中学校二年)は、小説を作る技法・技術を自分なりに読み解いて説得力があった。松本清張の短編小説の魅力を発見する優れた作文で、最優秀賞となった。同じく最優秀賞の澤田裕翔さん(埼玉県立川口北高等学校二年)は、「顔」のピカレスクロマン

どの感想文からも、読むこと・書くことを楽しむ、筆者それぞれの生き生きとした人柄が伝わってきた。応募されたみなさん、ありがとうございました。



イラスト:山藤 章二

編集・発行  
松本清張記念館  
〒803-0813  
北九州市小倉北区内2番3号  
TEL 093 (582) 2761  
FAX 093 (562) 2303  
https://www.seicho-mm.jp  
制作 (株) エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日 毎週月曜日(休日の場合は翌日)、年末年始(12/29～1/3)、館内整理日
- 観覧料 一般/600円(480円) 中・高生/360円(280円) 小学生/240円(190円) ※( )は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分 小倉駅からバスをご利用ください(小倉城・松本清張記念館下車) 車: 北九州都市高速 大手町ランプより5分

